鹿児島与論会創立９０周年記念式典・祝賀会

朝焼けに噴煙あげる桜島

平成 29 年 11 月 26 日（日）午前 11 時 30 分より
於；ジェイドガーデンパレス
鹿児島市上荒田町 19 番 1 号

与論町町民歌

作詞　内　与詩守
作曲　益田　元甫

一、
黒潮はるかに　明けわたり
朝日に燃える　さんご礁
自然のめぐみ　拓きつつ
あかるく進む　わが与論
ああこの空に　この海に
みんなの夢が　あふれてる

二、
港に世紀の　声すれば
畑にキビの　茂るうた
玉なす汗も　美しく
ゆたかに伸びる　わが与論
ああこの島に　この土に
まことの花が　咲き香る

三、
名残りもゆかしい　城の跡
あこがれ寄せる　百合ヶ浜
昔をしのび　今を知り
心をむすぶ　わが与論
ああ　この町に　この郷に
かがやく明日が
待っている

故郷（ふるさと）

作詞　高野　辰之
作曲　岡野　貞一

一、
うさぎ追いしかの山
こぶな釣りしかの川
夢は今もめぐりて
忘れがたきふるさと

二、
いかにいます父母
つつがなしや友がき
雨に風につけても
思いいずるふるさと

三、
志をはたして
いつの日にか帰らん
山は青きふるさと
水は清きふるさと

鹿児島与論会創立９０周年記念

式典・祝賀会　次第

第Ｉ部　　式　典　　11：30～

司会　久留米貴久子

1	開式のことば		坂本哲郎　副会長
2	式辞		高橋　肇　会長
3	ご来賓祝辞	与論町長	山　元宗　様
		与論町議会議長	福地元一郎　様
		全国与論会代表	竹内　英健　様
4	ご来賓あいさつ	衆議院議員	金子万寿夫　様
5	ご来賓紹介		田畑博明　幹事長
6	感謝状贈呈　（功労者４名）		高橋　肇　会長
7	功労者代表あいさつ		佐藤　持久　様
8	祝電披露（勝みなみ、		
9	閉式のことば		嘉味田瑞子　副会長

＜展示コーナーご案内＞

○与論今昔写真集　　○　鹿児島与論会旗　（復刻旗）
○大相撲　「千代乃皇」　手形・写真
○プロゴルファー　「勝　みなみ」　優勝トロフィー・賞状
○キックボクシング元チャンピオン　「田畑　隆」　写真集

第Ⅱ部　　祝賀会　　12：30～

司会　吉川奈津美

開会あいさつ　　嘉味田洋祐　実行委員長

祝賀の舞い　　かぎやで風（御前風）　　高橋　肇　遠矢節子

乾　杯　　関西与論会会長　　本園茂徳　様

≪演芸の部≫

1　舞　踊　　八千代獅子　　小原和代

2　舞　踊　　長良川演歌　　港　フジエ

－与論献捧－

3　三味線クラブ演奏　　ゆんぬ遊び人唄　　黒田晃正　川上哲三　田畑徳吉

＊与論サヨサ節　＊与論ラッパ節　　酒匂泰三　田畑榮次　田畑玲子

＊ヨーテー節　＊ニザヨイカナヨイ　　山下千枝　山下善健　沖都康子

＊与論小唄　＊五尺ヘンヨー　　高橋肇　金子まつ子　田上静子

4　舞　踊　　花も実もある人生航路　　酒匂健進

5　舞　踊　　舞妓の夢音頭　　山田頼子　中村心美(4年生)

中村靖子　中村心結(2年生)

－特別企画－

6　ユンヌ今昔物語り

第一部　　映像と朗読　　今日の故郷・与論の姿　　朗読：久留米貴久子

第二部　　太平洋戦争（大東亜戦争）と与論

1　戦争への足音　2　太平洋戦争　3　与論の戦時中

第三部　　演劇　　「アダンが揺れた日」　　原作：柳田琢也　著者：宮原敏博

脚本：嘉味田洋祐

与論在郷隊長（山　市郎）　林　五十一

挺身隊・国防婦人会　竹下栄子　田中すが子　花木千鶴子　沖都康子　田上静子

金子まつ子　　与論村長代理（柳田泰助）　池田直尚

奄美・与論守備隊長（小野少尉）　竹山　素晴

兵士Ａ　橋口拓矢　兵士Ｂ　川田真也　兵士Ｃ　吉田昴史　兵士Ｄ　小川風姫

防空壕「散兵壕」母親Ａ　原田歩美　母親Ｂ　本咲愛

監督　坂本哲郎　　音響・照明　田原崇志　村田寿章　吉田泰斗

軍隊教練指導　山下善健　　衣装　嘉味田瑞子

１０分休憩

7　太　鼓　　Dreams Come True Ⅱ　　USUKI 夢太鼓　白尾克彦含む１４名

8　舞　踊　　芸者ワルツ　　小原耕藏　港平安里
9　琉球舞踊　　黒島口説　新里舞踊教室　斉野要子　有川京子　名嘉永子
濵田 桂　中間のりえ　酒匂春美

１０　舞　踊　　あんたの花道　　福満あい
１１　舞　踊　　俵積み唄　　竹井智子
１２　舞　踊　　いのち燃やして　　仁　光子

１０分休憩

－ゲスト出演－

１３　かりゆしバンド　　ミニライブ　　田畑哲彦・美也子　外
たましいの島　他

誠の与論島　　婦人部１５名（踊り）

カチャーシー（六調）

万歳三唱　大牟田荒尾与論会会長　　町　謙二　様

閉会のことば　　嘉味田瑞子　副会長

ユンヌ今昔物語り

―アダンが揺れた日―

原作　柳田琢也　脚本　嘉味田洋祐

第一部　今日の故郷・与論の姿

第二部　太平洋戦争（大東亜戦争）と与論

一　戦争への足音

二　太平洋戦争

三　与論の戦時中

第三部　アダンが揺れた日（演劇で綴る）

原作　柳田琢也

脚本　嘉味田洋祐

制作　鹿児島与論会

九十周年記念事業実行委員会

第一部　今日の与論の姿

平成二十九年三月七日、私たちの故郷与論が奄美の島々と共に我が国三十四番目の国立公園として指定された。また十一月十七日には天皇・皇后両陛下のご来島を頂き、島民一同歓喜に沸いたところである。

かつて「東洋の海に浮かぶ一個の真珠」と形容された美しい海と空、そして島のすべてのたたずまい。それが「我が国の宝」として認められた事になる。

先祖来この豊かな自然の懐で育まれたユンヌンチュ（与論人）の体の中には、先祖を敬い、近隣を大切にし、人と人とのつながりを大切に、絆を重んずる穏やかな社会風土がある。

時には自然災害に苛まれる厳しい現実がある中で、島人は島の気候風土を活かした農業、畜産、漁業に加えて、観光産業、企業誘致などで「オンリー

ワンの島興し」を目指して力強く邁進している。

旧来与論には「教育立島」の気風と精神が根強くあり、どの時代でも教育が大事にされてきた。その中で若者を育む「旅立ちの教育」や「島思いの教育」などを感じる。

今では有為な若者達を島の内外で多く見かけられる。まさに前途洋々して頼もしい限りである。

現在、島の行政の拠点である役場の移転・建設の準備が進められている。

第二部　太平洋戦争（大東亜戦争）と与論

一、戦争への足音

明治維新後の日本は、欧米列強のもと国策として富国強兵、殖産興業の育成と軍備拡大に力を入れた。その中で日清戦争、日露戦争、更には第一次世界大戦へとエスカレートしていった。

「戦えば儲かる戦争景気」と言われた日本経済は、大正九年の戦後恐慌の襲来を境に悪化の道を辿り始めた。更に昭和四年アメリカに端を発した世界恐慌は、日本にも波及し、慢性的な不況から抜け出せない日本は、国民の目を海外に向けさせるために活路を大陸侵攻に求めた。

軍部の強引な大陸出兵は、中国の不信をかい、排日運動を生むこととなった。昭和六年の満州事変、上海事変へと飛び火する中、昭和七年に満州国を建国した。

国際連盟は、日本軍の満州からの撤兵等の対日勧告を強硬に迫ったが、日本はそれを無視して国際連盟を脱退、国際社会から孤立していった。

そして昭和十六年（一九四一年）十二月八日未明当時アメリカ合衆国最大の海軍基地・真珠湾を襲った。奇襲攻撃であった。

二、太平洋戦争

ハワイ真珠湾攻撃をきっかけにして、日本はついに連合軍との戦争へと突入していった。

開戦当初は、陸軍による香港、フイリピン、シンガポール、ジャワ、ビルマなどの侵攻に成功し、日本の不敗神話は健在に見えた。

だが、昭和十七年六月のミッドウエー海戦において、日本が世界に誇る空母四隻を含む艦載機二八五機を失う大惨敗を喫した。

更に、制空権を握った米軍は、南太平洋の島々を奪還し、昭和十九年七月にはサイパン、グワム島が陥落、十月にはレイテ島海戦で日本海軍は敗北して、全ての戦力を失った。

次々に陥落していく戦局の悪化に備えて、昭和十八年、日本軍は不沈空母構想に転じた。飛行場を徳之島（天城）に一カ所、沖縄に三カ所、宮古に二カ所、そして石垣一カ所に建設を急がせた。

陸軍本部は、昭和十八年十二月に徳之島全島から二千二百八十人を徴用し、明けて十九年一月には、日増しに悪化していく戦局に備えるために、沖永良部、与論から三百五十人を徴用。作業は昼夜問わず突貫工事が行われ、昭和十九年七月には完成された。

そして、沖縄防衛の最前線守備隊として、第六十四旅団混成隊一万一千五百人が配備された。

―追　記―

飛行場建設人夫として与論から徴用された方々三十四人が、与論へ帰島途中に敵の潜水艦に発見され、開門丸（二十トン）と共に帰らぬ人となった。

三、与論の戦時中

南西諸島一帯の戦局悪化に伴い奄美守備隊は、昭和十九年六月二十七日、与論の守備隊として、小野少尉外四十四人の小隊を与論に配備した。

更に翌二十年二月には、小野小隊長を直属の上官とする与論在郷軍人一個中隊が編成・召集された。

中隊本部には、中隊長として（山一郎）、第一小隊長（宮崎清菊）、第二小隊長（町茂）第三小隊長（山下勇夫）、第四小隊長（白尾義之助）が配された。

そして、小野少尉指導の下に統一されるようになった。

駐屯部隊の本部は、青年学校校舎（現中学校）に置かれた。

昭和二十年の六月には、激戦地・沖縄は壊滅的な状況で、米国連合軍の脅威は各島々にも及ぶようになった。

七月になると、小野隊長の指揮の下に防空壕（避難壕）の建築が始まった。場所は島全体が見渡せる九十七高地（ピヤーヌパンタ）一帯の松林の中で軍・官・民が入る広大な「散平壕」である。島の人々は来る日も来る日も重労働に耐え忍んで完成させた。

一般的には、防空壕は親族が所有する「アブ」（鍾乳洞や自然にできた岩陰に手を加えた隠れ場所）を集団で使用していた。平常時はヤドウイ（掘立小屋）で生活し、農業などをしていて、空襲警報のサイレンが鳴ると防空壕に駆け込んだ。

いよいよ戦局は厳しさを増し、昭和十九年の十月十日の大空襲以降は、空襲警報発令のサイレンの鳴る日が日増しに増えていた。

昭和二十年の三月の頃には、茶花の街の商店街は全て焼き尽くされ、学校も役場も郵便局もほとんど焼失してしまっていた。

第三部　アダンが揺れた日（演劇）

―追　記―

奄美群島の戦禍「一般住民の死者・行方不明者数」

与論……四名　※激戦地・沖縄（二十四万人戦死者）に隣接している中で最小の犠牲者の数であった。

永良部…四十七名　※全島併せて

徳之島…二百六十七名　※全島併せて

瀬戸内…三十二名　※四地域併せて

住用…十二名　実方…三十三名　宇検…十五名

大和…十四名　名瀬…十一名　龍郷…七名

笠利…五十九名　喜界…百十一名

―参考資料―

『与論町史』『知名町史』『和泊町史』

『天城町戦後七十周年記念誌』

『終戦前後の郷土』（鹿児島奄美会誌）

インターネット他

ご来賓の紹介

与論町長	山　元宗	東京与論会会長	山下清男美
前与論町長	南　政吾	前東京与論会会長	竹内英健
同令夫人	南　英子	東京与論会相談役	山下政宏
与論町議会議長	福地元一郎	東京与論会相談役	村田　健
元与論町議会議長	町田末吉	東京与論会前監査役	野口弘明
前与論郵便局長	永野展秀	東京与論会前副会長	堀行　隆
与論観光協会長	永井新孝	関西与論会会長	本園茂徳
龍美会風花苑	川畑益雄	関西与論会監査役	高井哲郎
与論町議会議員	高田豊繁	関西与論会副青年部長	立田与一
与論町議会議員	林　隆壽	関西与論会	立田磯代
公民館絡協会長	山本池富	大牟田与論会会長	町　謙二
茶花副公民館長	町永建身	大牟田与論会	朝岡光男
与論アイランド園芸	竹村哲雄	球栄建機社長	村田　宏
与論竹村自動車	竹村繁代	同令夫人	村田和子
有村酒造社長	有村晃治	奄美会幹事長	喜入章夫
有村酒造専務	有村泰和	天城会会長	元田重信
ＪＡ与論統括理事	森　繁信	名瀬会会長	永井洋臣
同上	本園金盛	徳之島会幹事	奥山嘉次郎
全国与論会幹事長	武東愛一郎	奄美大島信用支店長	喜納　進
与論町栄誉町民	佐藤持久		
全国与論会顧	竹本　登		
東京与論会問	叶　生二		
同令夫人	叶　千代子		

感謝状贈呈者ご芳名

（敬称略）

ご芳名	推薦理由
佐藤持久	鹿児島与論会発展の為に常に心を寄せて頂き当会の発展に多大なる貢献をなされました。
仁　光子	24年の永きに亘って鹿児島与論会の要職にあって献身的に邁進されました。
山下満男	副会長として前回の80周年記念事業を成功に導き、続いて第31代会長として多大の実績を残されました。
嘉味田洋祐	全国与論会長及び与論会会長として郷友会の本旨である会員相互の親睦と福祉の向上に貢献されました。